

偽らざる海色

和田さとし

それまでの陣屋跡に〈城〉の建築が始まって早四年、ほぼ外壁が浮かび上がっていた。三重三階の和式城郭である。小振りであったが天守閣から津軽海峡の海原を間近に見下ろせる威風堂々とした雄姿であった。

「念願の築城も来年いっぱい完成じゃな。なんとも麗しい」

馬坂橋より下国崇教が新築の城に見惚れていた。壁面の白色が晩春の陽光に明るく滲んで目に鮮やかであった。

「なるほど、間近で見ると迫力がありますね」

ふいに下国の背後から、のんびりと感想を述べたのは、まだ童顔の背が高いだけの青年であった。

「これは熊坂殿、ご足労いただき恐縮至極」

呼び出されたのは江戸詰御番医、熊坂蘭斎の孫である。ただ庶出という噂もあって実のところ彼の出生はあきららかではない。蘭学を習得中であるというだけあって、その眼光の鋭さで聡明さが一目でわかるほどであったものの、どこか浮世離れた、危うい若者といった風体である。

名を蘭歩といった。

「松前にとっては僥倖ということですか。とはいえ海禁を堅持するほどの脅威ではあるまい」

言葉の端々に嫌味を覚えるのは蘭歩の性質のようにも思え、本人は、たいして気にはしていない様子である。

「これ、言葉を慎みなされ、御家老下国殿になんという口のきき方。よいか、福山城は北方の重要な海防の旗手。その名にふさわしい立派な舎殿となるであろう」

控えていた作事奉行が、慌てて取り繕うように窘めた。

確かに蝦夷松前家は唯一〈城〉のない領分には違いなかった。なにせ米が獲れぬ。極寒の地で石高なしとなれば城などあるはずもない。むろん一、二万石程度という松前家の財政的な面目はあるものの金銭面からも築城は見果てぬ夢であった。ところが昨今の不審な海外船の出没に幕府は神経を尖らし海防策の一環として、北方監視強化のため〈城〉をもたらしただのである。

「しかし、どこが最新式なのだろうか」

蘭歩は相変わらず、鋭利な眼で見まわし首をかしげた。従来通りの建築物としか見えなかった。

「知っての通り、この福山城は市川一学的设计。構造に西洋技術を駆使し、兵法を具現化した地取から普請を一手に引き受け、事実上の作事まで指揮していただいておる。そんじょそこらの城とは違うのだ」

下国はもはや得意満面の笑顔である。それから追従するように作事奉行の説明が始まった。城壁は砲撃に耐える鉄板で覆われ、敵兵を惑わす複雑な回廊、鉄砲口の工夫を備え、寒さ対策として屋根は銅板で葺かれ、そもそも石垣も特殊な石を一個一個職人の手で研磨して組んであるという——血なまぐさい城塞ではなく、まさしく藩の威光として家臣たちの心に響く御殿であるのだ、と説いた。

「そもそも鎖国があるのか、ないのか自分にはわからない。結局、井の中の蛙じゃないですか、勝手に身を縛って——我々は野蛮人と評されている」

そこまで言いかけ、禁令が国のあり方を喪失させている、という言葉で蘭歩は飲んだ。さすがに機嫌がいい老中の面前でも僭越的な発言は危険である。

「これこれ、鎖国は厳然たる国是、築城は立派な国政行為ですぞ」

「これは失礼。長崎での生活が長くてね、あそこは楽しく見聞するだけでも知恵というものがあります。海外の事情をなぜ貴殿等は知ろうとしないのか、そう思っております」

下国の穏やかな表情もくもり始めた。

「禁令という政策の中で民の命を温存し、恙なく暮らすためのも」「禁欲を定めとするのはいかなものか。そうした無用の成分がある」

「無用の成分——さてどういう言い回しかな」

「海の禁令の長き醸成の中で生まれ育ったという事実は如何ともしがたく、鎖国の中で生まれ育ったことは、つまり鎖国に戻ってゆくことでしかない、そこで息絶えることが果たして幸福でしょうか」

「鎖国の中で死ぬ？」

下国は鼻白んだ。開国論者ぶって理屈をこねまわすことが利発であるという風潮を裏返せば、真に幕政を知らぬ岡目八目の言論家にすぎず、ただの若さゆえの無粋でしかないのだろう。

「その事より、依頼の件、よろしいか」

下国はやや威圧的に蘭歩に言った。

するとあからさまに顔を歪め「そのような大任を引き受けると言われましても、ね。

お答えのしようがないのです。研修の身の上、まだ医師たりえませぬ」と蘭歩は口籠った。「なにを今さら、蘭齋殿の孫とあろうものが。長崎で蘭学を、そして本道（内科）研修のため我が松前家が設立した〈済衆館〉で研鑽を積んでおられる方、医師以外の何物でもござらぬ。ゆくゆくは家中のお抱えとして嘱望されているのです。その才覚は蘭齋殿と遜色はありませぬ」

確かに蘭歩にとって唐突な依頼ではあった。昨年の秋、領地内のエトロフ番屋に捕鯨船員三名が漂着したのである。こうした異国船の難破に伴い異人を収容することは、さして珍しいことではないが、煩雑な手間や不要な出費ばかりが管轄する領地の過重となった。

「迷惑千万、甚だしい限りです。だが捨て置き、とも言えず、とりあえずここ松前まで移送されることになっている」

「米利堅^{メリケン}と聞き及びますが」

「まあ、本人がそう言うならそうなのでしょう。異国人は皆同じにしか見えないが、兎にも角にも彼ら三人を返送せねばなるまい」

「本国まで？」

「まさか、長崎の湊までが我々の職務。あとは奉行所に引き渡せばよいのです」

蘭歩は、そうした外交政策には疎かった。不可抗力によって異国船を放棄したり脱出し、国内に逃れた異国人を良心的に保護し本国へ送還するのが道理だということはわかる。その際、漂着人を一旦外国航路のある長崎へと回送するのが定めというのは依頼があるまで知らなかった。

「長崎奉行所に移送する際、目付や見張り番の足軽を護送衆として招集しております。ただ、その異人のうち一名が重篤らしくて、命の危機があるのかは定かではないのだが医師同伴がよろしいかという江戸の判断……指示でもある。頼めないか。人命にかかわることなのでな」

異国人の長崎回送は今始まったことではなかった。長く幕政の決め事として護送は、その時折の為政者による意向をうけ許諾されるのである。お伺いをたて、その判断は幕閣老中格の重い決定として、ただ従うだけである。

「医師などやめて絵師にでもなろうかと考えております」

「よいか、熊坂殿。これは呑気な物見遊山ではない」

下国は一喝した。

個の主張がまかり通るものではないと知りつつも、蘭歩は医療に心底没頭している訳ではなかった。そんな蟠りを直截に吐露したところで、どうにかなるものではなく、愚

痴ってみただけである。だいいち海洋での長旅はとてでもないが完遂できる気がしなかった。

「今回の護送は江戸の老中殿も関心を寄せている。なにせ蝦夷は〈異域〉であり、それほど幕臣たちの眼中になかった地域。それゆえ幕府の判断が覚束ない部分があり、これまで異国人を長く逗留させ、客死する事態もあった。各領国への通達通りに運ばぬのがこの蝦夷だ。食べ物や習慣、言葉など一切異なる立場の人間を預かることは難儀なこと。半年もせぬ間に逃走したり病死したり気が触れたり難渋するものなのだ。こうして蝦夷からの異国人移送に幕府が関心を持ったことは、ここが〈異域〉などではなく国土として認めて下さったなによりの証左、それなりの意味はあるのだ。松前が一人前の領地たることを誇示するのが、祭りごとの機会なのだ」

幕府が蝦夷を認めたといい言い回しが妙だった。

「つまり、祭りごとなのですか」

「勘違いなされるな。祭りごとが人命を救うのではない。人命を祭りごとに利用するのが知恵というもの」

一見、正論にも思えた。

松前家には、そうした自虐史があるのだろう。だから海賊、盗賊行為が大々的に喧伝されれば、逆に国防という政が松前を巻き込み一人前の領地支配たる権威を承認する者たちになるのをどこか喜んでいられる風にも思える。国を利用して救われる人がいればいいのかもしれない。

ただ孤立した国家を死守しようとしている幕政の意識がどの程度のものか判然としなかった。どこか対岸の火事のように関心はひっ迫したものでなく、この曖昧さが松前家の守備にしても信憑性に欠き、侵犯の脅威も略奪も後手になっている。

拓けた文明国の船が必要に迫まれ、この大地の周辺を航行している。海を閉ざして見ぬふりをしているのは我々の方ではないか。つまり領海、環海の国家観の話ではなく、ただ漫然と内地の兵や民、百姓たちに非常事態宣言を敷いて国境を見守るだけであり、それに終始している。了解の闘争ではなく不審者を回避するだけの手立てだった。

人命という大仰な言葉が煙管の煙のようにすぐさま消えて、臭味だけが残った。

「ところで熊坂殿、この一件は内々の儀とお達し。他言無用、家族、知人には言っってはなりませんぞ」

下国が耳元で呟くように釘を刺した。蘭歩は目をそらしながらも、幕命として肯う他なく曖昧に何度か顎を引いた。

数日後に松前の湊にエトロフからの商船が着き猶予はないという。

出港の日、蘭歩は朝から巖に腰掛け半紙になにやら書きつけ時間を潰していた。海域の向こうに薄く盛り上がる内地が見渡せひどく眺望がきいた。その稜線は竜飛岬で、こちら側の白神岬と対峙していた。停泊している赤船の帆柱に幾羽かカモメが舞って、景観は静かで長閑そのものであった。

ここで足軽の男と待ち合わせるようになっていた。

筆で波止場を模写していると、影がさして「おや、なかなか上手いじゃありませんか、旦那」と顔見知りでもないのに老人が陽気に声をかけてきた。市松と申しやす、と勝手に名乗った。かなりの老齢であった。

「下国殿が家臣に溢こぼしてしまいましたよ、絵描きになりたいと血迷っていると。不本意な考えはよしなされ。そのような道を作るから迷うのである。道がなければ迷うこともない、ただひとつの道がある。それが世の常」

「どの船かな」

蘭歩は老人をキュツときつく見詰めると気乗りしないのか、半紙を丸め、その顔に投げつけた。反古はポンと足軽の額で弾け、風に舞い上がった。

「ご機嫌斜めなのは聞いておりやすが、ご無体はなさらぬよう願います」

市松は半笑いで言った。

「無体は武士の尋常。私は武士ではない。たんに退屈なだけだ」

「そりゃ、よござんした。えっと、三人の夷狄さんは、すでに小早船で、あの赤船に移されていやす」

「赤船？ 商船ではないのか」

「家中の手船に移し替えておりやす。海詠丸でございます。豪商連中はみな尻込みして自前の商船を貸すはずがありませんから」

偶然にも絵にしたのは、その珍しい船であった。

「ええ、弁財型の二倍はあるでしょうな」

この近海を遊弋しつづけていたのであるうか。外壁を朱の漆で染め上げた似にたり関船がねが沖の海原に停泊している。寸胴の武骨さは藩の軍船らしく優雅さに欠け、むしろ護送にはふさわしく思える。ふっくらした白い帆は力強い春風を充分に乗せ、孕んだ女の腹のようでもあり純潔でもあった。その清らかさが航行の気運を高めているようで蘭歩には頼もしく思えるのだった。

荷足船で市松と共に海詠丸に近づき、繩梯子で這い上がってゆく。すると手を差しのべる者がいて、甲板に引き上げてくれた。

「こちら目付蠣崎平八様です」

市松が紹介した四十過ぎの小男は目ざとい商人根性を宿したかのように眼玉がぎよろぎよろと不審に動いてる。常に人を値踏みしているのか、油断がならない緊張を漲らせている。

「お主かい、済衆館の若い医師ってのは。蘭斎殿の命令で松前家で本道（内科）を学ぶためわざわざ南国から北国へとやってきたのに、また南国とはご苦労なことですな」

事情通を気取っているようだが、異様に熟柿臭かった。

それから平八は、なぜか退屈そうに欠伸を噛みしめた。賭場で夜明かししたらしいですよ、と市松が耳打ちして、それが本当であろうと思われた。

「たった三人の護送衆とはチト寂しいけど、仕方あるまい」

「私は気乗りがしなくてね」

吐き捨てるように蘭歩は言った。

「まあ、そんなに腐るな。お抱え医や町医者が悉く断ったには理由がある」

確か家中の医師は七、八名在籍しているはずで治療施設の創設も整い町医なら幾らでも居る。他の医師の都合がつかぬ、とは解せぬことだった。なにか魂胆がありそうで懸念が胸に蟠っていた。

平八は遠慮なく蘭歩の耳に囁いた。

「異人さんの一人はなんでも天然痘らしい。が、実情はわからん」

蘭歩はぎくりっとした。

「天然痘？ 感染しているのか？」

「やはり聞いてなかったかい。家中や医師連中が逃げるのも当然、テメエが疱瘡に罹ってお陀仏さ」

「誰か所見したのですか」

「さあ、な。船底の小部屋に隔離しておいたが、家老の下国様がお主を選別したには魂胆があった訳だ。たいして害のない医師を派遣し早々に厄介払いしたいのさ」

害のない医師？ 熱く人命の尊さを論じた下国が、実のところ半人前の自分を指名したのは魂胆があったのだ。早々に感染者を蝦夷から引き離すための奸智であったか。

珍しく蘭歩は舌打ちをした。

「出航前に診ちやくれねえか。それで判断も違ってくる」

安易に、そのような感染者を診断できるものでないし近づける状態ではない。疱瘡に関して半世紀も前、中川五郎という男が、ロシアから痘苗の株をこの蝦夷に運んでいる。むろん、そんな治療法など潰えて久しい。その起因が禁令であることが蘭歩最大の苛立ちだったに違いなかった。

今ここで、本物の天然痘の罹患者とであったならば、医学を拒む国家への憎悪は最大限爆発するだろう。

蘭歩の手に怒りの震えが止まらなかった。そして長く放置し船底の荷室に放り込んでいるという患者への無責任さに呆れ、もはや拒むことはできなかった。

「あんたの見立てで、出航の有無が違ってくるんでね、よろしくお願いいたしますよ、先生」

それから平八は、また欠伸をした。この目付は、どうも親身に藩命に従っているとは思えなかった。

荷室への潜戸から梯子で船底まで下りると、陽も遮られ、闇が大きく控えていた。蠟の火が数点点在したものの、無造作に置かれた俵や木箱の間が通路なのか、手で方向を探る。つきあたって、格子状の太い木枠で断たれている。

座敷牢のようになっていた。

仕切りの向こう側に薄闇に紛れて、ふたつの影が見えた。薄汚れた破れた下着と膝までの股下みたいなものを穿いている。異様な発音の名前で呼ばれていた男たちだ。

一人は褐色の肌をして身体は厚く大柄だった。もう一人の異国人もひどく巨漢で長身であり顔の造りが大きく自分等と比較にならぬほど肥大化して見える。長崎では、よく西洋人を見かけていた。どれも陽気で異質な衣装であったが、たいして違和感はなかったものの、この二人は髭は伸び放題、頭髪は逆立って土埃がまとわりつき、皮膚の汚れも酷く、長く放置されたのだろう無残な骸にすぎなかった。

驚いたことに、二人の双眸には布が巻かれていた。目隠しをされている。それに、どうやら端座しているのだと気づく。膝を曲げるのが苦しいらしく不自然に巨体を傾け、そのまま斜めに窮屈な姿勢をとっている。正座は強要されているのだろう。あたかも鎖で拘束されているような体罰にも見え、斜めになった上半身を腕で支えて、それ以上型を崩さぬよう必死に踏ん張っている。

どこからか呻く声があった。陰になっていた牢外の右方の筵に臥している人影が見えた。天然痘を患っているという風評から、仲間からも放置されているのだろうか。男性は衰弱しているらしく近づいても反応しなかった。呼吸は荒く熱が高いのか汗が噴き出している。

口元を布で覆い、そっと近寄り身体を覗き込む。脈をとり、目ヤニで固く閉じた瞼を指先で開け眼球の動きを見た。皮膚に感染症の形跡は見当たらなかった。胴に何重もの布が巻かれ骨折でもしているのか背筋が歪だった。何箇所か傷口が膿んで腫れている。全体的に幼虫に似てぶよぶよしていた。おそらく海難事故の怪我と思われ、ろくな治療

もされず悪化したのだろう。自らを汚されているようで、なんたる残忍と心の声が口をついて、憤怒が募った。

簡単な英語で蘭歩がなにか欲しいものとはと、ささやくとウォーターと、か細く言い返した。

早速、甲板に戻ると水主に水を運ぶよう言いつけた。

表と三役が遠巻きに窺っていたので、大丈夫、天然痘ではない、安心せいと声高に言っている。

乗組員たちに穏やかな表情が戻った。

平八が船頭に合図すると、すぐに錨が海中より引き上げられた。

「待て、誰が出立せよと言った。松前に運んで治療するのだ」

蘭歩は抗議した。

「先生、治療は長崎に着いてからでもいいでしょう。天然痘でなければ、それでいい」「あれでは……命が持たぬぞ」

「あつしらの仕事は異人さんの面子が三人揃えばいいでね。これで先生の役目も終わり、ゆつくりしてくださいな。動き出したら、あとは表、つまり船頭に任せるしかないんですよ、それが海の掟って奴ですよ」

薄笑いが相変わらず消えない平八は、一度きつい顔で睨むと、また相好を崩した。

五月の風いだ海面を赤船は緑風を裂くように迂りはじめた。唯一、外国航路のある長崎までを日本海側の西廻りとし酒田、新潟、小浜、松江などに寄港し水、食料を調達しつつ順調であれば四十日ばかりの運航が始まった。

市松が船べりで呑気に煙管をふかし表と話し込んでいた。時折、波間を楽しむかのよう海面を覗き込んで濃いつい鉛色に唾を吐いていた。

「この海域は参勤交代の折、うまく殿様が渡りきったかと狼煙で合図するほど荒くてな、手練れた船頭でなきゃ、なかなか進めることができない」と表は自分の有能さを誇示するように明るく笑った。

その合間に割り込むと、蘭歩は市松に詰め寄った。

「なぜ幽閉する」

「俺に言われても、上からのお達しでね」

蘭歩は強引に市松の腰から下げた鍵を取り上げると、ふたたび船底に潜った。あの牢の錠前を外すと、中に入った。平八と市松が慌てて追って来た。

「旦那、まあ、落ち着いて」となだめるように市松が言う。

「奴らは可哀そうな漂流者である以前に夷狄なのだ」

平八は相変わらず酷薄なうすら笑いを浮かべている。

「夷狄？ 見ろ。瀕死ではないか。そんなことを言っている場合ではないぞ。夷狄の前に同じ人間だ。いつになったら、お前らはわかるんだ」

「問者ではないと誰が言えよう」

平八したり顔で言う。

「身体の疲弊が甚だしい、なぜいままで看病しなかったのだ。やせ衰え目にくぼみ、呼吸も荒く、ひとりは寝込んだまま痙攣さえおこしている。満身に食事も与えておらんだらう」

三人には介抱が必要なのは医師の立場でなくともわかることであつた。

「いいか、先生。これは移送ではなく護送なのだ。これが幕府の対応のことだ」

「その対応というのはなんですか」

咎めるように蘭歩は訊いた。

「よいか、お達しは、こうだ……この国に入れず、地を踏ませず、見るもの閉ざすべき也、これが奴らに対する幕命、老中様からのお達しだ」

幕府にお伺いをたて、結局、異国人に、この国を見せるな、というお達しで認可されたのだから。なにを警戒しているのか。茫漠とした監禁行為に思えた。長い鎖国の伝承はお粗末な海防論を前例とした腐心でしかなく、異国人を畜生並みに扱う偏見はもとより、侍たちが遵守するのは決まり事のみなのだ。

「つまり国を閉ざしているのは我々ではなく、奴らの無謀に対応しているにすぎない。わかるな」と平八が注釈した。

鎖国が被害者意識であつても蘭歩が、この国の制度に幾つも懐疑的な思いをいだいても、理不尽さを甘受する理由にはならないのだ。

「だが彼らは罪人ではなからう。いったいなんの真似ですか、目隠しまでして」

抗議をしたものの平八は無頓着であつた。

「わかっちゃ、いますよ。けど、この世が、旦那の考えと違っていただけでさあ。それに我々になにができるっていうんですか」

そんな意見など聞き飽きていた。蘭歩の本性というべき医師の眼が、二人を捉えていた。蘭歩は英語で〈椅子の方がよいか〉と訊ねた。すると一人の亜米利加人が言葉に反応し、何度も頷いた。食べ物してほしい。それから葉はないかと声高に英語で応答したので、平八が、いきなり、その異国人を足蹴にして何度か腹を蹴った。

「この野郎、べらべらと喋りやがって図に乗るな、黙りおれ」

褐色の肌の男の咎めるような鋭い視線に、平八が更に反応し彼にも拳を振るつた。

蘭歩は驚嘆した。こんな惨い扱いをする理由が理解できなかった。

「おい、市松、奴らに縄を打て」

怖い顔で平八が命令した。市松は蘭歩の顔色を窺うばかりで「なにも、そこまで」と尻込みをしている。平八がまた拳を上げようとしたので、蘭歩は、その手首を掴むと、振り上げた。これ以上の狼藉は許さんと恫喝すると、さすがに平八は大人しくなった。

「目隠しぐらい、とつてもよからう」

「だったら表にでも聞いてみな」平八は変に不貞腐れていた。

甲板に駆け上がると、表に自由にならんかと問い詰めた。

「さて？ 護送は幕府の慣例。雇われ者には権限がありません。しかし、海路は、地乗り——常に海岸線に沿って進む。いったい幾つの領地を通過すると思います。十や二十じゃきかない。この国の大地や町や暮らしを見られては困る、つまり彼奴等の目に、領土を触れさせちゃならない。その可能性があつてはならない、それが目を塞いでいる理由でさ」

一週間ばかり、この二人の護送衆と蘭歩は口をきかなかつた。

船は佐渡を過ぎた。

平八と市松が毎夜、酒盛りをするのが御座の間という四畳部屋で寝泊まりの場所であつた。

蘭歩は、あいかわらず低層の荷室で筵に包まって一人で寝ていた。彼らと相性が合う訳でもなく、むしろ宇田川玄信の医学書を紐解くにはちよつどよかった。しかし夜更けまで水主らの骰子博打が甲板で開帳されるので、馴染めない声高な怒号が響き、時折、蘭歩を苛つかせた。

ある夜、のっそりと平八が荷室に入ってきた。

「先生、大変なことになっています」

固い表情であつた。

「なんだ、銭の工面か」

「あの異人さんが首をくくっています」

「えっ」

慌てて立ち上がったので梁に頭を打ちつけた。

「縊死か」

「ええ、まだ、拙者しか知りませんが、その通りで」

だが、のんびりと責任感のない様子なので「見張りは確か貴方の仕事ではなかつたですか」と蘭歩は不審げに訊いた。

「そりゃ、そうなんですがね」

平八はバツの悪そうな顔で、頭をかく。賭場が開かれれば牢の異人など構っている暇がない、といったところだろうか。

「悪いが、来ちゃくれませんか」

遺体は、確かに梁から縄を垂らし、長く肢体を伸ばしており、すでに息もなく床を小便の跡が生々しく濡らしていた。

二人で床に横たえさせた。死者は傷を負った件の男であった。

「あの瀕死の男だな」

蘭歩は黙とうした。

「まあ、辛かったんでしょね。聞き取りでボブという名前で、なんでもカルフォニアという名の町に住んでいるらしい」

「長崎に着けばなんとかなると思ってたのだが、そうか自死を選んだか」

「参りましたな。いかがいたしましたしょう」

「どうするもなにも事実を告げるだけだろう。遺体は塩漬けにして保管する他あるまい」

「いいえ、先生。拙者しか知らない、ということは、そのことじゃありません」

「なんの話だ」

「見ちまったんです。あの異人さんを殺すところを」

蘭歩は、すぐに天を仰いだ。わかりやすい反応であったが、目撃されたのは事実なのだろう。観念したように、ああと言った。

「たまたま賭場で負けがこんで小便をしていたら、変な物音がして、地下に潜ると、お前さんがこの異人さんの首に縄を巻いて、梁に通し引っ張っていたところを」

「なぜ、黙って見ていた」

「それでも医師かね、熊坂蘭歩殿。人を責める前に、あんたは人を殺したことを知るべきだろう。医師のまえに人間としてそんなことをすべきかどうかを」

蘭歩は沈黙した。その計画は当初より抱いていた。蝦夷でも長く病苦に耐えてきた。航海が一月以上つづけばその間苦しむ。この海域で治療薬もなく快復など覚束ず、精々、あと半月足らずの命と思えた。事実、ここ二、三日急変し意識を失い、つきつ切りで看護していても手の施しようがなく、無力感ばかりが蘭歩を蝕んだ。希望はなくなかった。新潟で異人を受け入れてくれるよう表に掛け合ってみた。埒も無く拒否されたのだった。

「病人だろうと遺体だろうと異人は異人だ」と言い訳のように表は呟いた。

……まあ、あとは拙者に任せて、とりあえず病死ってことで処理しましょう、と平八

は役人らしい割り切った素の顔で言った。

「ただ幕府がこの異人さんを見殺しにしたと言うのなら、お門違い。それに異人だから、こうして冷遇しているというのも考え違いだね。実際殺したのは、あんたでさあ」

身体から力が抜けて跪くと「私の判断は蠣崎殿にお任せします」と蘭歩は弱く言った。「あんたを評定所に差し出すかは……そうさね、まあ考えておきましょう」と薄く笑う。牢の残った二人は目隠しのままである。蘭歩は拙い英語で仲間の不幸を告げた。彼らはどこか予見していたのか、たいして驚きもしなかった。静かに頭を垂れ、十字をきり祈った。

小浜で停泊し、その夜から波は丘並みに大きく発達し、黒い雲が近づいた。嵐が迫っていた。

蘭歩は鬱々と時を過ごした。船酔いに過ぎないのか、殺意を点検すると過誤であったかと罪悪に耐えることに限界がきて一切の気力を欠いた。医師の判断であったか、それとも良心の煩悶であったか、今では判然としない。そうするしかない解決策だったのかもしれない。診る度に責務が湧いて、薬にできるものなら、その選択肢もあるのだろうと焦燥するばかり、それとも天寿が決めることであったか。

丸一日、嵐に赤船は耐え京付近の外海を無事航行していた。

翌朝、表が血相を変え、船底の蘭歩を起こしに来た。

「先生、大変でさ。御目付様が見当たらない」

意味がわからず、快晴の甲板で市松に事情を訊いた。昨夜、酔った平八が嵐で揺れる船から誤って海中へと落ちたと言った。

「まことか」

ええっ、と市松は水主らの前で、しつかり頷いた。

「海に、か」

あの嵐では命はあるまい。

目的地まで、まだ半月ばかり海上である。目付の平八が居なくなったことは素直に意外なことであったが、責任者を失ったところで使命が途切れることはないだろう。ただ蘭歩に不幸な感覚は湧いてこなかった。

海洋は不思議なぐらい風いでした。

昼すぎ、船先で悄然とした心持でいると、市松が変にのんびりした顔で握飯を差し出した。

「あの首をくくったボブっていう異人さん残念でしたね」

「うん、傷が思ったより深くて手の施しようがなかった」

今となつては、その死因は自らの胸中にしかなかった。

「ところで旦那、あの蠣崎という目付は酷吏こくりでね」

迷惑げに市松は淡々として言った。嫌な奴でさあ、と堂々と誇る。蘭歩は死者を悪く言う心持がわからなかった。

「あの目付はアイヌとの交易を監視する役割なのだが、その立場を利用して、あやかし放題」

「あやかし？」

「アイヌの女を犯したり、妾にしている。サンカの徒党を阿片窟で働かせ、清国との廻船で抜荷と共に暴利を貪つてやがる」

阿片……を。抜け荷……も。その辺りの不正は辟易するほどよくある話で特段、珍しいものではなかった。今の役人どもが清廉潔白とは思えない。

けど、奴は度が過ぎた、と市松が言った。

「黙認している家中の侍たちも同罪なのだが、扶持の低い我々だって、そうしなきゃ生きてはいけない。ところが、どうもアイヌを手下のようにこき使うあの男なんざ良心つてものが、はなっからない。あつしは昔から奴を許せなかった」

「まさか転落死というのは——嘘か」

「先生なら漢方に詳しいかもしれないが、スフをご存知でしょう」

「スフ？」

「アイヌが熊を矢で倒すときに使う毒でさあ」

「スクールか」

「ええ、蝦夷に自生している猛毒の根でさ。それを煎じて、昨夜、あの目付の酒に混ぜて殺してしまいました」とあっさり告白した。

殺した、という口調が軽く、怖い気がした。凍てつく蘭歩の胸中をしり目に市松は喋りつづけた。

「知っていますかね、抜け荷の方法を。勿荷はねといって、嵐のような時化たときに船がひっくり返らないように積載荷を海に捨てるんです」

「勿荷？」

「あたかも捨てたように少ない荷物を寄港の関所に報告し、密かに別の小舟で海に浮かんでいる荷を運び出すっていう子供騙しの手口なんです。海は神さまの口と言って、なんでも引き受けてくれるし、そして黙っててもくれる」

この足軽が目付の蠣崎平八の遺体を勿荷のように海に捨てた、と堂々と吐露する理由が、今ひとつわからなかった。

遺体の見返りが、蝦夷の平穏だとしても言いたいのだろうか。

「ひとつ訊いていいか」

「ええ」

「この機会を狙っての殺害か」

「ええ、長年の遺恨でさあ。海は神の口だ……沈黙してくれる」

「私がお前を奉行所に密告したら？」

「旦那、あんたは海を理解していない」

「海を理解するとはどういうことだ」

「幕府だろうと異人だろうと目付だろうと海にとって関係のないことさ。ただこうしてあるだけだ」

「海は真正の神か、裁きの」

「いや、再生の神でさ……守ってきたのは、この海ですよ旦那」

「再生？」

「とどのつまり、あつしらも海でさあ。海なんですよ、旦那。海そのものに隔たりはない。阿保どもが勝手に名付けたところで我々が海なら、生死はここにしかないって思いませんか」

ポンと蘭歩の肩を叩くと市松は優しい顔をして、はやく握飯を喰っちまいなと言った。長崎に着く、ほんの数日前のことである。市松が甲板で足を滑らせ頭部を強打すると、そのまま頓死してしまったのである。あっけない死がなにを意味するのか蘭歩には理解できなかった。

昏倒する寸前、彼は視界に現れた帆柱高く飛来するカモメたちをただ見ているように思えた。

「旦那」

見届けていた蘭歩に最期の力を振り絞るように震える小声で言った。

「ありや、天使でしょうか？」

蘭歩が視界を振り上げると、カモメたちの白さ、翼の姿や飛翔の優雅さが天使の似姿へとかわって見えるのだろうか、一種の幻覚と思え不思議な心持であったが、ああっと返答した。実際、市松にとっては無数の天使に違いなく、その導きに添うよう意識を失った。

蘭歩は残念そうに彼の死を認めた。首筋の脈を診るとき、ちらっと覗いた数珠のようなものに気づいた。ロザリオとかコンタツと呼ばれる切支丹のお守りであろう。すると天使という言葉がようやく理解できた。市松が、こうして終始、肌身離さず大事そうに

ロザリオを付けている異教徒であったことが意外だった。彼の強い信仰心がどこにあったのかわからないし、下位であったが武士だから世相と対峙して生きてきたのだと思うと複雑な思いがした。

老いた異教徒の死顔は妖艶に笑んでいる。白い闇に飲み込まれるまで市松は確かに宗教家の夢を見ていたに違いなかったが、中空をぼんやり眺めていただけの目に指をかけると蘭歩はゆっくり閉ざした。それから彼の名誉のためロザリオを引きちぎると、海に放擲することにした。

切支丹であってはならなかった。

なにも言わない海は、それを飲み込むはずである。

長崎に到着すると奉行所の者が疲弊した異国人二人と遺体を引き取った。

ついでに市松も無縁墓地に葬ることとなった。

やがて、蝦夷に向け出港する日、蘭歩はなにを思ったのか、ぷいっと赤船を降りると、そのまま長崎の異国じみた城下町に紛れ込んで行方知れずとなった。

天然痘への研究、研鑽が始まっている佐賀の医師への合流とも思われたが、定かではない。

松前に戻った、という話も聞かない。

結局、三人の護送衆は松前に戻ることはなかったのである。

翌年、嘉永七年（安政元年）。

神奈川条約によって長年の呪縛が解かれ下田、箱館が開港するに至った。これを機に遭難者を長崎まで護送する長き習慣は終焉したのである。

尚、松前福山城は明治初年に落城、天守閣以外は取り壊され、結局、完成から僅か十五年ほどの短命の〈城〉であった。

ところで蘭歩に関して、幾つかの風評があった。

どれも信憑性に欠けるが……そのうち長崎海軍伝習所に身を置き、あの咸臨丸かんりんまるの医師となつて、サンフランシスコまで渡つたという。実際、七年後の安政七年に太平洋を横

断した遣米使節船ポーハタン号の護衛艦であった咸臨丸の医師は松前伊豆守御用医師である牧山修卿で、三名の医師見習いが乗船する。そのうち二名は身元が不明であった。

その一人が蘭歩であり亜米利加へと渡つたとしても不思議ではない。むろん牧山自身二十七才と若年であったが蘭歩が改名した姿であったとは考えにくい。

或いは単なる水主として紛れ込んで渡米を完遂したという噂は絶えない。目的がなんであったか、むろん定かではないが、おそらく縊死させた黒人の最期に委託された遺言のようなものを伝えに行ったのではないか。もし本当なら咸臨丸の見習い医師として乗

船できたのは幸運であったかもしれない。

それも鎖された海が大きく彼の意志を隔て不可能に思えたころに海に放擲するはずの市松のロザリオを、あたかも黒人の遺品のように仕立て、家族に届けたという美談がなぜ広まったのか、変わらぬ海原だけが知っているようで、開国が偶然であったか必然であったかということは、確かに海のみぞ知る。

ただ蘭歩の行方が杳として、つかめないのもこの真相はわからないのである。

開けた蝦夷の松前湊は浅い藍色を湛え、滑らかな海面は漁に向かう小舟や入航する廻船、漂う北前船の白い帆影で賑わうのであった。